

2012年度 大学英語教育学会 (JACET) 関西支部秋季大会 JACET Kansai Chapter 2012 Fall Conference

発表要旨集 / Summaries

研究発表 / Research Papers 9:50-12:05

Session 1 【11201教室: 2F】

<研究発表1 Research Paper 1> 9:50-10:20 (in Japanese)

Siriの使用を組み込んだ英語発音指導の効果：パイロットスタディー

Effects of Pronunciation Training Combined with the Use of Siri: Pilot Study

佐藤 浩子 SATO, Hiroko (関西大学大学院研究生 Research Student, Graduate School, Kansai University)

本研究の目的はSiri (iPhoneに搭載された自動音声認識装置)を組み込んだ発音指導の効果を学習者の英語発音改善と発音への意識向上という二点から検証することである。指導内容はSiriへのコマンド文の練習、phonicsの学習、スピーチ活動からなり、大学生6名に対し1学期間の授業を通しておこなった。指導成果は事前と事後の音読音声ファイルとアンケートを用いて評価し、(1)参加者の発音が改善し(2)英語らしい発音に対する意識が向上したかを検証した。結果は聴覚的判断では発音改善が指摘されたが、iPhone内蔵のspeech-to-text機能により記述された語句の正確さに関する有意差はなかった。アンケート結果からは英語らしい発音に対する意識が高まり、学習行動に反映されていることがわかった。一般化はできないが、わずかな発音改善ではSiriの音声認識レベルの閾値を越えることは難しいと示唆された。また学生はSiriの使用を楽しみ、授業内での使用が授業外での学習行動を促せる可能性が示唆された。

<研究発表2 Research Paper 2> 10:25-10:55 (in Japanese)

ベルクテストの妥当性を検証する：2012年度データにもとづいて

Validation of the VELC Test: Implications from a 2012 Data Set

静 哲人 SHIZUKA, Tetsuhito (大東文化大学 Daito Bunka University)

ベルクテストとは我々が開発した聴解3パートと読解3パートからなる大学生用の熟達度テストである。本発表は等化された複数フォームのひとつについての妥当性検証の結果報告である。2327名のデータを分析したところ総合スコアの信頼性は.94と非常に高かった。293~820と広い範囲にスコアが分布した結果でもある。受験者を所属大学でグルーピングしての分散分析では群間の有意差が確認された。またパート別スコアに対する因子分析により次元性が確保されていることも確認された。次に項目難易度の安定性を確認するためサンプルをランダムに2分割し別々に項目難易度を推定しプロットしたところ、 $r = .99$ で、測定誤差範囲内において項目難易度の不変性が確認された。さらに当該フォームを数ヶ月の授業期間の前後に受験した206名の前後スコアを比較すると全体に有意な伸びが確認され、数ヶ月の授業による英語力の変化も本テストによって検出可能と判断された。

<研究発表3 Research Paper 3> 11:00-11:30 (in Japanese)

LD研究から見た英語教育への提言

Suggestions to Japanese English Education from LD Research Outcomes

村上 加代子 MURAKAMI, Kayoko (神戸山手短期大学 Kobe Yamate Jr. College)

本研究は欧米と日本のLD研究から、外国語教育に関する研究動向を整理し、これからの日本人の英語学習への新しい試みを提案する。欧米でのLD研究対象は、読み書き困難が主役である。1975年以降、英語圏を中心に子どもの音韻分析と読み習得の関係について集中的に研究が行われてきた。また、LD生徒を対象とした外国語学習/習得研究も同時期から始まっており、母語習得との比較調査で、音韻認識障害が、母語と外国語習得を阻害する共通要因であることが指摘されている。日本の音韻認識研究およびLD研究においては、音韻認識と言語特性の違いからLD学習者にとって英語習得の困難が指摘されている。英語の音韻は日本語のように自然に身につくものではなく、英語圏のディスレクシアと同じ症状が多く日本人学習者に生じていると推測する。音韻を意識し、読み書きへとつなげる指導は、LD学習者だけでなくすべての日本語を母語とする学習者に有効である。

<研究発表4 Research Paper 4> 11:35-12:05 (in Japanese)

日本人学習者の読解における学習スタイルの好みについて

Learning Style Preferences of Japanese Learners in Reading Comprehension

有本 朱里 ARIMOTO, Akari (広島女学院大学大学院生 Graduate School, Hiroshima Jogakuin University)

本研究は、日本人学習者の読解における学習スタイルの好みの傾向について明らかにすることを目的とする。意識的に用いる読解方略とは対照的に、学習スタイルは、個人が生来的にもっている、無意識的に好んで用いる方法であり、認知、知覚、性格的側面がある。日本人学習者の学習スタイルの好みについての研究はいくらかなされているが、読解における学習スタイルの研究はあまりなされていない。そこで、本研究は読解にかかわる学習スタイルに焦点を当て、①日本人学習者の学習スタイルの好みの傾向、②認知、知覚、性格的スタイルにおける特徴の2つの課題を取り上げる。研究方法は、日本人大学生64名を対象とし、認知、知覚、性格的スタイルに関する40項目からなる質問紙法に基づく。研究の結果、学習者は全体的、視覚的に情報を処理することを好み、曖昧さに寛容であり内向的な性格である傾向が高いことが明らかになった。

Session 2 【11306教室: 3F】

<研究発表5 Research Paper 5> 9:50-10:20 (in Japanese)

モダリティ実現態としての英語法助動詞の計量的概観

A Statistical Study on Modal Auxiliary Verbs

陳 擘 CHEN, Ye (神戸大学大学院生 Graduate School, Kobe University)

モダリティを正しく使うことは外国語能力の重要な部分であり、学習者が難しく感じているものである。英語の中で、モダリティの表出は様々であるが、本研究は法助動詞に注目し、地域、ジャンル、時代の各変種が、法助動詞の使用状況にどのような影響を与えているかを解明し、母語話者と学習者の法助動詞運用状況を調べた上で、法助動詞の使用に関する情報を適切に教育現場にフィードバックしていくことを目的とする。コーパスを用いた頻度調査を行った結果、法助動詞は3つの変種において、差があることが確認できた。また、アジア圏7カ国の英語学習者の使用特徴が明らかになり、過剰・過小使用される法助動詞を抽出することができた。今回得られた結果をもとに作った各法助動詞のプロファイルを学習者に見せることで、より適切な法助動詞使用が可能であると考えられる。

<研究発表6 Research Paper 6> 10:25-10:55 (in Japanese)

ルーブリック2009の教室における有用性：ETS Criterion®と比較して

Usefulness of the Rubric 2009 in the Classroom: A Comparison with ETS Criterion®

正木 美知子 MASAKI, Michiko (大阪国際大学 Osaka International University)

大年 順子 OTOSHI, Junko (岡山大学 Okayama University)

久留 友紀子 KURU, Yukiko (愛知医科大学 Aichi Medical University)

金志 佳代子 KINSHI, Kayoko (兵庫県立大学 University of Hyogo)

本研究の目的は、独自に開発したライティング・ルーブリックによる評価と、ETS Criterion®による評価との比較を通して、独自ルーブリックの教室での有用性を探ることである。全体印象評価であるCriterion®では日本の大学生は同じようなスコアを与えられる傾向があるが、分析的評価である独自ルーブリックでは詳細な評価を行うことができ、学生により有用なフィードバックを与えられると考えた。そこでCriterion®で3回とも同じ評定値(3~5)がついた6名の英作文(計18編)を、経験豊富な日本人評価者に独自ルーブリックを使って評価(6段階)をしてもらい、その結果とCriterion®の評価とを比較した。その結果、Criterion®で3回とも同一評価を受けた複数の学生が独自ルーブリックではそれぞれ異なる評価となり、各々の英作文の特徴がわかる評価となった。

<研究発表7 Research Paper 7> 11:00-11:30 (in Japanese)

iPadを利用した発音指導が英語スピーキングスキルへ及ぼす訓練効果—日本人大学生に対する実証研究—

The Training Effect of Pronunciation Instruction and Activities Using the iPad on English Speaking Skills: An Empirical Study of Japanese EFL Learners

上田 愛 UEDA, Mana (大阪教育大学大学院生 Graduate School, Osaka Kyoiku University)

日本人大学生に対し英語スピーキングを向上させるための2種類のトレーニング (①音読練習と②対話練習) をiPad (Evernote, ShowMe) を利用して半年間にわたり実施し訓練効果を比較した。大学生を2群に分け、A群には訓練期間前半に②、後半に①を、B群では逆の順で実施し、訓練前(事前テスト)・前半訓練終了後(中間テスト)、両方の訓練終了後(事後テスト)に発話テストを実施した。事前から中間にかけて、音読練習を実施したB群で音読時の発音正確さが向上、A群では変化はなかった。訓練の種類を入れ替えた中間から事後にかけては、音読→対話練習の順で実施したB群では発音正確さと流暢さが向上し、A群で発話時の発音正確さが向上した。これらの結果から、発音正確さ向上のためには対話活動のみでは充分でなく、音声に注意を向けさせる集中的な訓練を実施することが重要であることが明らかになった。

Session 3 【11307教室: 3F】

<研究発表8 Research Paper 8> 9:50-10:20 (in Japanese)

繰り返し聴きと発話速度の聴解に対する影響

The Effects of Repeated Listening and Speech Rate on L2 Listening

原田 洋子 HARADA, Yoko (豊中看護専門学校 Toyonaka Nursing School)

松村 優子 MATSUMURA, Yuko (近畿大学非常勤講師 Part-time Instructor, Kinki University)

同一の教材を繰り返し聴かせる活動は学習者の理解を促進させるためのサポートになりうる(Chang & Read, 2007)が、その回数、タスクとの関係や学習者への効果を深く考慮することなく実践されることも多い。また、発話速度(リスニング速度)が異なる条件下では聴解に対する影響が異なると想定される。速度が増すと理解が難しくなることは先行研究で実証済みであるが(Griffiths, 1990、他)、機械により速度を落としても聴解に好影響があるとは限らないという指摘もある(Blau, 1990)。本研究では、1. 繰り返し聴きが聴解に及ぼす段階的な影響、2. 異なる速度(遅い、普通、やや速い)条件が聴解に及ぼす影響、3. 回数・速度に関する学習者の情意要因と聴解との関係という3点に絞って検証する。併せて、繰り返し聴きの回数、速度に影響する要因を学習者、タスク、リスニング教材など多方面から考察する。

<研究発表9 Research Paper 9> 10:25-10:55 (in Japanese)

日本人英語学習者は主語をどうとらえているか—量的・質的研究

Japanese Learners' Awareness of English Subjects – A Quantitative and Qualitative Research

梅原 大輔 UMEHARA, Daisuke (甲南女子大学 Konan Women's University)

富永 英夫 TOMINAGA, Hideo (兵庫県立大学 University of Hyogo)

日本人学習者が作る英語の中に時折、*This river cannot swim.のような主題—陳述型構文の影響によると思われる文を見かける。日本人が英語を習得する上で主語—述語型の表現法を獲得する必要があるが、学習者は主題型構文を排除するとき何らかの明示的知識を持っているのだろうか。本研究では、日本の3大学の学生約180人を対象に、様々な意味役割の語を主語位置に置く正しい英文と非文を提示して、6値による文法性判断と訂正/説明のタスクを実施した。結果は量的、質的両面から処理した。その結果、主語の名詞性に対する気づき、主語の動作主や有生性に対する気づきを明示的に持っている学習者がいる一方で、日本語訳に影響されて主題型構文を排除できない学習者には意味役割に対する意識が希薄で、局所的規則への意識が強い傾向があることがわかった。これは、特に初級段階で意味役割への気づきを高める活動の重要性を示唆している。

<研究発表10 Research Paper 10> 11:00-11:30 (*in Japanese*)

英語教育への「文法化」研究の応用可能性—動詞派生前置詞を中心に—

The Possible Application of Grammaticalization Research toward English Education

林 智昭 HAYASHI, Tomoaki (京都大学大学院院生 Graduate School, Kyoto University)

本研究の目的は、文法化理論の英語教育への応用可能性を論じることである。文法化は「一方向性」を持ち「動詞>現在分詞>前置詞・接続詞>前置詞/接続詞」という流れを辿るという説が支持されている(秋元 2002)。本研究では、仮説として、動詞の文法化過程における意味変化の性質が、語用論的推論、形態・統語論的側面への意識を高める可能性を論じる。考察として、Hopper & Traugott (2003)における *go*の *be going to*への文法化、*according to*, *instead of*, *owing to*の構造的再分析、秋元(2002)の *considering*, *regarding*, *relating to*, *touching*の歴史変化、林(2012)の身体的基盤に基づく動詞派生前置詞の分類等が与える文法的示唆を論じる。結論として、文法化理論が、動詞を中心とする文法能力・語用論的意識向上に貢献可能性をもつと示したい。

Session 4 【11308教室: 3F】

<研究発表11 Research Paper 11> 9:50-10:20 (*in English*)

Gender Differences in Motivation for Learning a Foreign Language

性別に見る外国語習得のためのモチベーション

スミザース ライアン SMITHERS, Ryan (大阪工業大学非常勤講師 Part-time Instructor, Osaka Institute of Technology)

Studies on motivation and gender in foreign language classrooms are almost always conducted on students attending secondary and post secondary educational institutions (e.g., Dörnyei et al., 2006; Ryan, 2009), with results continually illustrating how female students are more motivated to learn a foreign language than males. Studies on gender differences in the motivation of adults studying a foreign language with mean ages over fifty do not appear to have been conducted to date. This study provides quantitative evidence to further explore the validity of a paradigm that traditionally exemplifies higher levels of motivation and effort for females that are learning a second or foreign language. At the heart of this case study is a group of 156 Japanese EFL students all over the age of 50, with a mean age of 64.2, who have been accepted into a four-year English conversation program organized by a municipal government. Data from this study concurs with previous findings that show females more interested in the L2 and more interested in the L2 community than males, but this study also bears findings inconsistent with other studies, in that males scored significantly higher on seven other motivational variables. In addition to shedding some light on an often overlooked demographic in the realm of FLA research, this study suggests that gender-based attitudes toward language learning change as a consequence of age-related developments.

<研究発表12 Research Paper 12> 10:25-10:55 (*in English*)

The Effects of a Short-term Study Abroad Program on Japanese Students' Attitudes to Language Learning and Cultural Understanding

短期海外留学プログラムが日本の学生の言語学習と異文化理解に対する姿勢にもたらす効果

ハリス ジャスティン HARRIS, Justin (京都産業大学 Kyoto Sangyo University)

This presentation reports on an ongoing research project on the effects of short-term study abroad on the attitudes of university students. The International Relations department at Kyoto Sangyo University opened in 2008, with the first intake of 1st year students. Annually since that time, as part of the program, students travel overseas after the completion of their first year to take part in a “field research” program. During their three weeks abroad, students attend language classes in the morning, and are involved in a content-based research project in the afternoon. On return to Japan they present the findings of their research to new first year students. An interview with a program coordinator identified the main goals for the program as being to bring about a positive change of attitude in students toward second language learning and to enhance cultural understanding. In 2010 and 2012, surveys were administered to all students pre- and post-departure in an attempt to identify changes in student attitudes to using and learning English and in intercultural awareness. Paired sample t-tests were run on each question and follow-up interviews were held with 10% of the participants. During the interviews, students were asked general questions about their experiences abroad as well as more specific questions aimed at exploring the survey questions in more detail. Results suggest that students are showing positive attitudinal change towards using and learning English. The presentation will include an overview of both the qualitative and quantitative data collected during the course of this research project.

<研究発表13 Research Paper 13> 11:00-11:30 (*in English*)

English Writing Development in Japanese EFL High School Students

日本人学習者のライティング発達過程に関する一考察

大賀 まゆみ OGA, Mayumi (立命館大学大学院生 Graduate School, Ritsumeikan University)

山下 美朋 YAMASHITA, Miho (関西大学大学院生 Graduate School, Kansai University)

This is a cross-sectional study on the writing development shown at a high school in Osaka in students from 7th to 12th grade (junior and senior high school). The 15 data samples from each grade were selected at random from a total of 238 writing samples. This study focuses on two aspects of the written language: 1) grammatical complexity and conjunctions and 2) lemmatized verbs and inflectional verbs. The data collected were analyzed both quantitatively and qualitatively. The main finding is that the grammatical complexity and the types of lemmatized verbs as well as inflectional verbs continue to increase from Grade 7 up to Grade 10, and level off. In addition, as students move up in grade, they learn to use additional subordinate conjunctions. Furthermore, grade 9 marks the time when the students start using “but” and “because” in the middle of a sentence rather than at the beginning. Students are able to use more of a variety of verbs and inflectional verbs as they get older as well. Most common are the simple forms of the verbs, be-verbs and commonly used verbs in the first three years but later on in the last three years more past-forms are seen. These results might be attributed to the favorable English learning environment of this particular school. In the 9th grade, especially, students receive intensive instruction mainly by native teachers of English.

<研究発表14 Research Paper 14> 11:35-12:05 (*in English*)

A Rasch Analysis of Grammatical Difficulty: What Influences Item Difficulty?

ラッシュ分析による文法難易度の検証：類似問題が異なる難易度を示すのはなぜか

西谷 敦子 NISHITANI, Atsuko (京都産業大学 Kyoto Sangyo University)

This study demonstrates the difficulty of writing items testing the knowledge of the same grammar point that show similar Rasch difficulty estimates. The participants were 872 Japanese university students, whose TOEIC scores ranged from 200 to 875. Five sets of tests were administered, all of which used a multiple-choice format with one correct answer and three distractors. The test results were analyzed with the dichotomous Rasch model. Even though the vocabulary and the sentence positions were carefully controlled and the two items looked parallel to teachers, they often displayed very different difficulty estimates. A questionnaire was administered concerning such items, and the students' responses suggested that they seemed to look at the items differently than teachers and what they notice and how they interpret what they notice strongly influences item difficulty. Teachers or test-writers should be aware that it is difficult to write items that produce similar difficulty estimates, and it is recommended to pilot test items to get statistical information about item functioning and qualitative data from students using a think-aloud protocol, interviews, or a questionnaire.

実践報告 / Practical Reports 9:50-12:05

Session 1 【11405教室: 4F】

<実践報告1 Practical Report 1> 9:50-10:20 (*in Japanese*)

大学院生のための英文アブストラクト作成指導

Instructing Japanese Graduate Students on English Abstract-writing

尾鍋 智子 ONABE, Tomoko (立命館大学 Ritsumeikan University)

英語教育の場において、長文をまとめさせたり、新聞記事の要約をさせたりすることは、貴重な学習活動の一つと認められてきた。しかし具体的に、どのように要約を作るかというノウハウ自体は、多くは個々の教師に任せられてきたとあってよいのではないだろうか。この実践報告では主に大学院生にとって必要不可欠である、自分の論文の英文アブストラクトを作成指導した際の事例を例にとった。本報告では10数名の大学院生の英文要旨をデータとして扱う予定である。結論としては、型を吟味させ、バリエーションを教えれば、学習者はファーストドラフトを意外に楽しく書くことができた。報告では半期の授業で得た以下3つの情報を共有したいと思う。一つに日本人学生の作成するファーストドラフトの特徴、次にその改訂の過程、最後にその過程で学生が何を身につけ学んだのかについて報告したい。今後さらに他の要約作成指導にも応用していければよいと考えている。

<実践報告2 Practical Report 2> 10:25-10:55 (in Japanese)

タスクベース学習：英語の名刺交換で促すビジネスコミュニケーション

Task-based Learning: Promotion of Business Communication with the Exchange of English Business Cards

塩見 佳代子 SHIOMI, Kayoko (立命館大学 Ritsumeikan University)

本実践報告では、専門科目へのブリッジ科目として開講されている経営学部の英語講読クラスにおけるタスク学習--名刺作成と名刺交換におけるビジネスコミュニケーション--の内容を紹介する。このクラスでは、テキストを用いて 昨今のビジネス事情や動向を学ぶが、会社設立をテーマとした章では、会社の形態や有名な起業家についての情報を得ると同時に、名刺に表記されているさまざまな役職の種類についても学ぶ。講読のクラスでは受信型の授業が中心になりやすいが、ここでは、学んだ内容を用いて発信するタスク導入を行った。具体的には、今回は国際舞台を想定し、英語の名刺を各自が作成すると同時に、ビジネス会議の前後における初対面の相手との英語による交流を設定した授業を行った。本発表では、実際に学生が作成した英語の名刺と英語によるスモールトークの話題などを共有しながら、学部を問わず実践できる、学生中心の参加型授業の様子を紹介する。

<実践報告3 Practical Report 3> 11:00-11:30 (in Japanese)

英語スキルの指導を超えて—ベトナムと日本の学生たちによる協働社会調査への道(II)

Beyond Teaching English Skills: The Road to a Collaborative Social Survey between Vietnamese and Japanese Students (II)

新田 香織 NITTA, Kaori (近畿大学 Kinki University)

2012年2月に約1週間ベトナムで実施したフィールドトリップの実践報告である。目的は少数民族の村人への個別アンケート調査と村近辺の川や井戸の水質調査であった。学生参加者は近畿大学総合社会学部2年生4名と、ベトナムダラット大学社会福祉学部の3名であった。このプログラムのねらいは「使う英語」教育の実践と、グローバルな視点の拡大、社会問題への意識の深化であった。英語教員など英語の専門職を目指す学生ではなく、国際協力の現場に興味を持ち、将来もその方面で何らかの貢献をしたいと考える学生の英語力は、どうあるべきかについて取り組んでいる。前回の報告では、ベトナムやラオスでの下見や資料収集、そしてフィールドトリップを行う上で必要とされる英語力のトレーニング、さらにSKYPEを利用してのベトナム学生との交流や打ち合わせについて言及したが、今回は実際のフィールドトリップの状況、そして学生たちのその後について報告する。

<実践報告4 Practical Report 4> 11:35-12:05 (in Japanese)

少人数グループにおける教材開発を通じた英語教師の成長

Teacher Development in the Collaborative Small Group Work: A Case of Material Development

小林 香保里 KOBAYASHI, Kahori (京都産業大学 Kyoto Sangyo University)

徳本 恵 TOKUMOTO, Megumi (立命館大学非常勤講師 Part-time Instructor, Ritsumeikan University)

大学での英語の授業改善を目指して、元同僚3人で教材を開発した。開発の一連の活動を通じて、共通の興味や目標をもつ仲間との協同作業がもたらす教師の資質開発効果に着目した。教材は、Reading を中心としながら英語の4技能の向上を図る授業を念頭において、必要なスキルをmini-lecture式のListening アクティビティにまとめた。授業案を共有することから始まり、教材の開発、開発教材での授業実践、実践後の学生へのアンケート調査を行った。一連の活動は教材開発をもたらしたばかりか、教師自身にとっての学びの機会となった。学習者としての視点を養うことができ、どうすれば学習が楽しく、また協同作業も成功に導くことができるかを考え、授業に生かすことができた。一年半に渡るグループの活動内容と開発教材の授業実践を報告する。

Session 2 【11406教室: 4F】

<実践報告5 Practical Report 5> 9:50-10:20 (in Japanese)

GTECテストに照準を当てたライティング技能向上に関する一考察

A Study on How to Develop Writing Skills Focusing on the Global Test of English Communication [GTEC]

和氣 依子 WAKI, Yoriko (平安女学院中学校高等学校 Heian Jogakuin [St. Agnes'] Junior and Senior High School)

大学入学に必要とされるアカデミックライティング力に繋げることを目的に、高校での通常授業を設計し、指導している。日本人の英語教員が通常授業を担当する一方で、ネイティブ教員が“Expert Program” (4技能を駆使し、リサーチを重ね、英語で語れる専門家を育成することが目的)を並行実施し、writingの技能を伸ばしている。学習者は情報源のを見つけ方や、情報の信頼性を見極める力を体得する。学習者自らが発見したものを発信することで、大学での学問研究に本プログラムで培われた能力が活けると期待される。書く分量を増やし、内容をさらに充実させながら、日本人教員による面談及びproof readingを通し、GTECの過去の出題問題を利用しながら論理的な文章になるように指導している。制限時間内に作成できる文章量の上昇とともにエッセイの基本構造(構成・展開)を押さえた答案作成ができるようになっていく。

<実践報告6 Practical Report 6> 10:25-10:55 (in Japanese)

小学生のための企画“Science in English”における英語を使った理科実験：複数学部の大学生TA、教員と地域社会の連携の試み

“Science in English” Program for the Local Elementary School Pupils: Cooperation with the Local Community, Science and English Teachers and TAs

齋藤 安以子 SAITO, Aiko (摂南大学 Setsunan University)

「Science in English 英語で科学!」は、英語特区にある公立小学校と、そこから徒歩10分の私立大学の外国語学部と理工学部が連携した企画である。「教室以外の場所で児童が英語を使う機会がほしい」という小学校と、「親子理科実験講座」を開いていた生命科学科の教員たち、「大阪中学生のためのサマーセミナー」で身体を動かして英語をたくさん使うプログラムを運営していた英語教員たちなど複数の組織による協力で実現した。参加した小学4・5・6年生は、いつもは特定の教員と教室で英語を使うが、この日は彼らがやりたくてたまらない理科実験を遂行するために、初めて会う多数の大学生や教員と英語で意思疎通するという挑戦をした。また理工学部と外国語学部の大学生TAが、わかりやすく伝えるための発話の工夫をし、英語でのデモをマジックショー仕立てにしてみるなど、幼い言語使用者を思いやって英語を戦略的に使うという教育的効果があった。発表では、企画の準備段階からの教案調整や教材調達、実際のプログラム進行における英語の使われ方などを、小学生と大学生TAの両方について分析する。また、複数の部署が連携する際の留意事項についても言及する。

<実践報告7 Practical Report 7> 11:00-11:30 (in Japanese)

大学リメディアルクラスにおける多読授業の実践—多読を通して自信をつける—

Implementing Extensive Reading in University Remedial Classes – Promoting Students' Confidence –

赤尾 美和 AKAO, Miwa (近畿大学非常勤講師 Part-time Instructor, Kinki University)

対象は、1年生の必修英語3クラス・再履修1クラスの合計80名から成り、半期30回・週2回の授業である。7割近くが入試で英語を受験しておらず、英語に苦手意識を抱いている学生も多い。授業は英語科から指定された教科書を中心に進めたが、その合間を縫って週1回・15~20分間多読を行った。まずは自分のレベルより易しい本を大量に読み、徐々にレベルを上げていくという方法に則り、絵本シリーズを中心に読んだ。「辞書は使わず日本語に訳さない・分からない単語は飛ばして分かった所をつなげて理解したり絵から推測する」ことを徹底した。最初は少し戸惑った学生もいたが、回を重ねるごとに集中力も増し、心地よい沈黙の中での読書となった。8割以上の学生が多読は楽しかったと答え、英語に対する苦手意識が薄れ、前向きな気持ちになったという学生が目立った。多読は、学生に自信をつけさせる効果的な学習法の1つであると考えられる。

<実践報告8 Practical Report 8> 11:35-12:05 (in Japanese)

英語ライティングコンテストを授業に取り入れる試み

An Attempt to Introduce English Writing Contests to University English Classes

五十川 敬子 ISOGAWA, Keiko (帝塚山大学 Tezukayama University)

本発表では、2011年度から2012年度にかけて授業で行った外部コンテストへの応募に向けての取り組みについて紹介し、コンテストに取り組むことの意義と英語教育への示唆について考察する。英語習熟度が中位層以下の学生に対し取り組んだ当初のねらいは、ペーパーテストでは測れない能力を刺激することと、英語に対する興味を喚起すること、そして「作品」を作ることによって達成感を実感させることであった。取り組んだコンテストは、“ESSC”(Extremely Short Story Competition: 日本「アジア英語」学会主催)と「大学生の洋書POP大賞」(全国大学生生活協同組合連合会主催)と週刊STの英語俳句コーナーである。50語でフィクション、詩、思い出などを自由に表現するESSCでは、学生の1人が最優秀賞に相当する賞を受賞した。外部コンテストに取り組むことの意義は、従来のテストや英作文の採点基準とは異なった基準で評価されることであり、新たな英語観に出会う機会を学生に提供できることである。

Session 3 【11407教室: 4F】

<実践報告9 Practical Report 9> 9:50-10:20 (in English)

Creating Motivation through Relevant and Interesting Materials

興味に沿った楽しい教材でモチベーションをもたせる

エデソル ドミニック EDSALL, Dominic (ロンドン大学大学院生 Graduate School, University of London)

This practical report will discuss how original materials were designed and implemented in order to motivate art students taking a mandatory English course at a university in Japan. EFL materials produced by global publishers for the average Japanese university student often focus on the interpersonal, social, or international nature of the English language. While there are many other courses that take an English for Specific Purposes approach with a focus on technical or career-related language as an alternative, very little material has been produced that focuses on fine art or art-history. While some of the art students in question may study abroad or travel to an English-speaking country, most may not have any interest in English or English culture beyond passing this mandatory class in their first year. The materials that form the focus of this report were designed to be relevant to the majors of these students drawing content from the artistic world and focusing on the skills needed to describe and discuss art in the wider world. How such a focus on content-based learning and motivation was combined with a process approach to learning will be discussed and a module of original materials designed in this way for students studying Fine Art and related subjects will be presented. The results of feedback from the students themselves and observation data suggesting that the students were more interested and more motivated will be discussed with reference to motivational theories.

<実践報告10 Practical Report 10> 10:25-10:55 (in English)

Using Manga to Develop Pragmatic Skills in University English Conversation Classes

語用論的能力を伸ばすためのマンガの利用～大学の英会話授業において

リッチモンド スティーブン RICHMOND, Stephen (京都学園大学 Kyoto Gakuen University)

One of the main aims of second language oral communication classes is to raise the learner's skill and confidence in conducting a real-time, unscripted conversation. A comprehensive second language conversation class should therefore include training in not only vocabulary and grammar, but also the pragmatic strategies required to begin, manage, and conclude simple conversation. Though prepared role-plays are usually the core of conversation classes, once learners have enough control over the target language to speak spontaneously, pragmatic competence becomes just as important as grammatical competence. These skills can be explicitly taught, though confirming learners' successful acquisition of them is often a more difficult matter. In this practical report, the presenter will describe how having learners create simple comic strips (manga) is useful mechanism that can be used in and out of class to bolster awareness of conversation strategies. Since manga are a ubiquitous popular culture medium in Japan, students are already quite familiar with the basic narrative format, and many of them readily take to producing original manga which demonstrate their familiarity and creativity with the target forms. As an obligatory component of this presenter's conversation classes, (in which regular oral testing takes place) manga have proven to be an effective written adjunct to spoken forms of exercise and assessment, learner artistic ability notwithstanding.

<実践報告11 Practical Report 11> 11:00-11:30 (in English)

Teaching to Individual Level in a Multi-level Class Using Automated Self-assessment-and-materials Recommendation Software

異なったレベルの学習者に対応した指導の試み：自己評価に基づく教材選択ソフトの利用

スミス アントニオ SMITH, Antonio (大阪大学 Osaka University)

Teaching all first-year English major students at a national university for many years, the author has consistently observed wide variation in speaking level. As a result, finding materials well-matched to each student has been a problem. As a solution, the author introduced automated self-assessment software based on the standard set of CEFR can-do's used at centers of higher education in Europe and had students obtain speaking & listening texts matching their self-assessed level. The texts are from a series designed for self-study and/or classroom work. The software matches each self-assessment-can-do to appropriate sections/units in the texts, so a student can see the units most relevant to him/her easily. Students with the same text/level (A2, B1, B2, C1) form groups. These then break down into smaller groups of two or three members missing a common can-do who select a unit recommended by the software to treat it. Students prepare the unit at home, practice together in class and demonstrate their ability to the teacher in a role play. Feedback from students and teacher inform software functionality upgrades. So far, students seem to be satisfied with the system because the material they use matches their level; it is neither too difficult nor too easy. Also, they can finish a text quickly because they only do units treating their missing abilities; as a result, after one semester students have already finished or nearly finished one text/CEFR level.

<実践報告12 Practical Report 12> 11:35-12:05 (in Japanese)

Web上の素材をもとにしたテキスト開発の試み—理系初中級学習者を対象として—

Developing Materials for Science Students: An ESP Approach for Low to Intermediate Level Students

服部 圭子 HATTORI, Keiko (近畿大学 Kinki University)

篠原 弘樹 SHINOHARA, Hiroki (近畿大学非常勤講師 Part-time Instructor, Kinki University)

山下 弥生 YAMASHITA, Yayoi (近畿大学非常勤講師 Part-time Instructor, Kinki University)

村瀬 寿代 MURASE, Hisayo (近畿大学非常勤講師 Part-time Instructor, Kinki University)

生命科学系学部に所属する大学生に関するニーズ分析を行ったところ、実際の研究発表や論文読解に役立つ英語学習が期待されていることがわかった。一方で、日常のクラス内での経験や観察から、教師たちは、たとえ英語が苦手な学生たちでも、理系の題材を扱った場合には興味をもって学習に取り組むと感じている。それらは語彙調査に結果にも表れていた。しかしながら、上級の学習者を対象とした科学系テキストは多いものの、初中級の学生対象のものはまだ少ないといえる。そこで、TOEIC300~350程度の学生を対象としたテキスト開発を試みた。Web上の生の教材 (Odyssey) を使用した読解や語彙学習などに加え、申込書、標識、電子メールなどESPのジャンルの観点も取り入れた開発テキストおよび教師用マニュアルを紹介する。そして、パイロット的に英語授業で使用した際の結果についても言及する。

公募ワークショップ / Workshop 10:00-11:30 【11202教室: 2F】 (in Japanese)

大学英語教員の授業力育成の試み—教材を通じた教員間ネットワークの構築—

Materials and Measures to Develop the Teaching Skills of College English Teachers: The Use of a Website and an Online Community

村上 裕美 MURAKAMI, Hiromi (関西外国語大学短期大学部 Kansai Gaidai College)

山田 陽子 YAMADA, Yoko (関西外国語大学 Kansai Gaidai University)

金井 啓子 KANAI, Keiko (近畿大学 Kinki University)

高木 佐知子 TAKAGI, Sachiko (大阪府立大学 Osaka Prefecture University)

本発表は、大学英語教員の授業力向上の機会提供を目的に開発した教材の報告を行う。これまで、授業改善を促す授業観察シートおよび手引書や各種ポートフォリオを開発してきた。だが、授業改善のための内省や、授業参観に対する教員の抵抗感はいまだに強く、この抵抗感を減じる工夫が求められている。本発表では、まず、同じ英文をもとに開発した、総合的な英語力を養う教材と、研究メンバーそれぞれの専門領域に関連した教材を紹介する。同じ英文から開発した幾通りもの教材を公開することにより、教材を閲覧した教員の授業への関心が高まり、授業力向上へとつながることを目指している。また、開発した各教材の活用方法を複数提案する。これにより、閲覧した教員が指導方法を工夫する機会となることを目指している。さらに、本発表では、フロアーの方々からも、開発した教材やその活用方法についてご意見や感想をいただく機会を持ちたいと考える。

ポスター発表/ Poster Presentations 11:00-12:35 (コアタイム Core time 11:35-12:35) 【11408 教室: 4F】

<ポスター発表1 Poster Presentation 1> (*in English*)

Role of L1 Lexical Knowledge on the Formation of Category Prototype in the FL: The Case of English Cutting/breaking Verbs

外国語の語意形成における母語の役割—英語の「壊す/切る」系動詞を事例として
綱井 勇吾 TSUNAI, Yugo (慶応義塾大学大学院生 Graduate School, Keio University)

Previous studies have revealed that diversity in word meaning across languages poses a serious problem for second language learners to use words in the same way as the target language speakers do when the second language (L2) has more repertoires in the vocabulary than the first language (L1). However, it remains an open question what meanings are assigned to specific word forms in an L2. This study investigated how L1 lexical knowledge influences the formation of category prototype in a foreign language (FL) when words of one language has overlapping yet distinct sets of referents with words of another language. Using a set of 67 video clips showing a range of cutting/breaking actions, we looked at how Japanese-speaking learners of English apply the cutting/breaking verb break or kowareru, and how their extension patterns are consistent with English-speaking monolinguals' extension patterns. Results showed that although Japanese-speaking learners of English formed their linguistic category in the L1-based fashion, they developed some knowledge on the category prototype in the FL. These findings suggest that the construction of category prototype in an FL is a dynamic phenomenon that may be subject to both L1 and FL influence, even though L1 lexical knowledge plays a key role in shaping category prototype even when words of different languages has overlapping yet distinct sets of referents with each other.

<ポスター発表2 Poster Presentation 2> (*in Japanese*)

**ダイアログにおける統語的プライミングの傾向：間違い探しゲームを使用したパイロット実験
The Tendency of Syntactic Priming in Dialogue: A Pilot Study Using Spot the Difference Tasks**

森下 美和 MORISHITA, Miwa (神戸学院大学 Kobe Gakuin University)

インタラクション仮説によれば、流暢さが異なる対話者間の共同作業はL2学習に役立つが、学習者間では必ずしも言語習得が促進されるとは限らない (Long, 1996他)。しかしながら、コミュニケーション重視の授業が増える中、学習者間の共同作業においても十分な効果が得られるようなタスクの種類や手順について調査する必要がある。本研究では、初級英語学習者 (n=20) に、ペアで交互に質問を続けながら、お互いの絵の相違点を見つける間違い探しゲーム (spot the difference games) を行わせた。一方が使用した構文 (疑問文) が、その直後にもう一方が使用する構文に影響を与えるかという「統語的プライミング」の観点から調査を行った結果、目標言語に関する知識が乏しい学習者同士が学び合うためには、単に既存のタスクを与えるだけでなく、発話を促す仕掛けを用意する必要があることが示唆された。発表では、これらの結果に基づくスクリプト付きインタラクションタスクを用いた実験計画についても紹介する。

<ポスター発表3 Poster Presentation 3> (*in Japanese*)

**大学英語教育における聴覚障害学生への支援体制の充実に向けて—面接調査より事例報告—
Toward Enhancing a System for Supporting Hard-of-hearing Students in College English Education - An Interview Study-**

飯塚 恵子 IIZUKA, Keiko (関西学院大学大学院生 Graduate School, Kwansei Gakuin University)

本発表は、大学の必修英語プログラムを受講した聴覚障害学生1名への面接調査の結果を報告するものである。調査内容は、1) 2年間の英語授業におけるやる気と不安の高まりはどのようなものであったか、2) 英語授業における支援体制をどのように評価するのかの大きく2点についてである。調査の目的は、聴覚障害を持つ受講者の経験を理解することで、今後、当該英語プログラムに聴覚障害学生が入学した際の支援体制のさらなる充実につなげていくことにある。半構造化面接法の下、面接者 (本発表者) と被面接者共に、パソコン文字入力と口頭会話との併用で面接調査を進めた。両者の文字入力結果をデータとして、内容分析を行った。その結果、受講中の具体的な不安の内容と有効だった支援体制から、さらなる支援充実に向けたヒントが見えてきた。本事例を共有することで、大学英語授業における聴覚障害学生への支援に向けた議論に貢献できれば幸いである。

<ポスター発表4 Poster Presentation 4> (in Japanese)

音韻知識が日本人EFL学習者のリスニングに及ぼす影響について

Effects of Phonological Awareness on Japanese EFL Learner's Listening Comprehension

藤本 恵子 FUJIMOTO, Keiko (神戸大学大学院生 Graduate School, Kobe University)

本研究の目的は、外国語環境での英語習得における音韻知識の使用とリスニング能力の関係を調べることである。第二言語のリーディングにおける認知処理のモデルであるDual Access Model (門田、1998)を基本理論としてリスニングに応用し、聴覚提示された言語情報であっても、視覚提示された言語情報が意味認知に至る経路を通して意味認知に至ることがあるとの仮説のもとに、教室条件下で英語学習をしてきた日本人大学生9名を対象とし調査した。研究手続きは、書記素音素対応知識を測るための音韻マッチングテストとStimulated Recallで収集した質的データの分析である。音韻知識使用と英語能力の関係を比較し、書記による言語情報を適切に音韻化できる能力を持つことが外国語環境での英語リスニングにとって重要であることを示す。

企画ワークショップ / Invited Workshops 13:20-14:30

Session 1 【11202教室: 2F】 (定員60名)

<企画ワークショップ1 Invited Workshop 1> (in Japanese)

Excelを使った統計解析とグラフ化入門

Using MS Excel for Statistical Analysis and Visualization

講師：水本 篤 MIZUMOTO, Atsushi (関西大学 Kansai University)

外国語教育研究では、教室環境で指導方法の効果を検証するような場合に、数値で示す方法が現在主流となっています。しかし、どのようにデータ分析をするかという理解がなければ、どのようなデータを集めればよいかもわかりません。本ワークショップでは、『外国語教育研究ハンドブック』(2012, 松柏社, 竹内理・水本篤共編著)の内容に基づき、外国語教育研究でよく使われている統計解析と、図表作成の方法を説明します。また、実際にデータを Excel で分析し、基本的な分析と図表作成を実習形式で行います。加えて、オンライン・プログラムで、高度な分析やグラフ化を行う方法も紹介します。発展編として、効果量、検定力分析(参加者人数を先に決める方法)などについても可能な限り説明します。対象は、まったく統計解析を行ったことのない人から、より良い分析方法、結果の提示方法を学びたいという方です。ご興味のある方はぜひ参加してください。

Session 2 【11201教室: 2F】

<企画ワークショップ2 Invited Workshop 2> (in Japanese)

カタカナ発音から英語らしい発音へ～大学生のための効率的な英語発音習得法～

Beyond “Katakana English” Sounds – How Can Japanese University Students Learn Natural English Pronunciation Effectively? –

講師：里井 久輝 SATOI, Hisaki (龍谷大学 Ryukoku University)

大学生にアンケートをとって見ますと、「きれいな発音、英語らしい発音で話したい」という希望が必ず上位に来ます。これは、長い間英語を学んできているのに、英語の発音が身につかない、身につけていないという苦手意識の裏返しと言えるかもしれません。日本人が陥りやすいカタカナ発音は、「英語らしく聞こえない発音」の元凶とされています。しかし、日本語と英語の音韻的差異をきちんととらえることができれば、少しの努力でカタカナ発音の壁を克服し、見違えるような発音にすることは決して無理ではありません。そのためには発音記号を軸に、segmental な要素と suprasegmental な要素の両方を視野に入れた、体系的な理解と練習が必要になります。「英語らしく聞こえない発音」を効率的に「英語らしい発音」にするための方法や、教室で実際に発音を教える際のヒントを、御一緒に考えてみたいと思います。

講演 / Plenary Lecture 14:50-16:00 【11304教室: 3F】 (in English)

Englishnization of Japan: Education Meets Industry

Speaker: YEE, Kyle (Englishnization Group, Global Human Resources Department, Rakuten, Inc.)

In an ever-changing world, educators have one of the most important jobs in society. Educators must prepare students to meet and overcome the challenges they will face in the future. As the language of business is quickly shifting towards the adoption of English, as demonstrated recently by several large companies in Japan, English language educators need to understand and prepare for the new demands of the business community. At the same time, educators and industry leaders need to find common ground in order to prepare students for their future careers in the business world. In this talk, the speaker will share insights of what it is like to lead an aggressive English language training program for thousands of employees. Such insights may help current and future educators better meet the expectations demanded by this fast-paced world. Business leaders demand and expect so much from their employees. Educators need to take an active role in working alongside people in the business community and design curricula which will provide graduating students with all the necessary tools and skill sets to compete at the global level. Our children depend on us and we shall not let them down.

シンポジウム / Symposium 16:10-17:40 【11304教室: 3F】 (in Japanese)

大学英語教育のベストティーチングとはなにか？ 各大学の教育賞受賞者が語る『私の授業』

What is the Best Teaching Method for College English Education? – Education Award Winners Share Secrets of Their Classes

パネリスト：日野 信行 HINO, Nobuyuki (大阪大学 Osaka University)

柏原 郁子 KASHIWABARA, Ikuko (大阪電気通信大学 Osaka Electro-Communication University)

竹蓋 順子 TAKEFUTA, Junko (大阪大学 Osaka University)

大阪大学および大阪電気通信大学における英語授業で、学生から高い評価を得ている3名の講師が、それぞれの授業に対する哲学や、独自に工夫している点などについて語る。日野信行氏は、授業当日の世界各国の英語ニュースを素材として、現実の「国際英語」ユーザーの世界に参加する英語授業の実践について報告する。英米の枠を超えた国際英語、異なる立場のメディアの比較によるメディアリテラシー教育、さらにグローバル教育など、さまざまな教育理念を統合的に実践している。柏原郁子氏は、英語を苦手とする学生を相手に、自ら楽しみながら英語を学ぶことができる力を養う授業を心掛けている。ここでは、授与対象となったリーディングの授業の内容構成、取り組み、ICT を活用し工夫している点などを紹介しつつ、大学英語教育におけるコーチングの試みを報告する。竹蓋順子氏は、学習者、大学、社会からのニーズに応えるため、「三ラウンド・システム」の指導理論に基づいた EGAP の教材を使用して、大学生としての英語基礎力を養成することを目指した授業を実践している。また、15回の授業が終了した後にも、学習者が具体的な目標を持ち、積極的に自律学習を継続できるような環境作りも心掛けている。